ペンテコステ礼拝説教「バラバラだから、聖霊がつなぐ」予稿
日本基督教団石神井教会　2023年5月28日

【旧約聖書日課】創世記　11章1～9節

1世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。2東の方から移動してきた人々は、シンアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。3彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくいの代わりにアスファルトを用いた。4彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。

5主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、6言われた。

「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。7我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」

8主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。9こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

【使徒書日課】使徒言行録　2章1～11節

1五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。

5さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、6この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。7人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。8どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。9わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、10フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、11ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

【福音書日課】ルカによる福音書　11章1～13節

1イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。2そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。

『父よ、
御名が崇められますように。
御国が来ますように。
3 わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。
4 わたしたちの罪を赦してください、

わたしたちも自分に負い目のある人を
皆赦しますから。
わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』」
5また、弟子たちに言われた。「あなたがたのうちのだれかに友達がいて、真
夜中にその人のところに行き、次のように言ったとしよう。『友よ、パンを三つ
貸してください。6旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何も出すも
のがないのです。』7すると、その人は家の中から答えるにちがいない。『面倒
をかけないでください。もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ていま
す。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません。』8しかし、言っておく。
その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、
しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。9そこで、
わたしは言っておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そう
すれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。10だれでも、求
める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。11あなたがたの中
に、魚を欲しがる子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。12また、
卵を欲しがるのに、さそりを与える父親がいるだろうか。13このように、あなた
がたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。
まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」

聖霊は一人ひとりに！【こども説教のために】

ペンテコステおめでとうございます。約束の聖霊は与えられました。二千年前の弟子たちと同じように、わたしたちにも与えられました。

ご復活された主イエスが天に昇られた後、弟子たちは 120 人ほどの仲間と共に一つ所に集まっていました。約束の聖霊を待っていたのです。

五旬祭の日です。「七週祭」とも呼ばれる、ユダヤの祭りです。昔、モーセが民をエジプトから連れ出した後、シナイ山で神から「律法」を授けていただいたことを記念して祝う祭りです。この祭りを祝うために、世界中から多くの人が集まって来ていました。きっと、弟子たちも出て行って多くの人たちとこの祭りを祝いたいと思ったことでしょう。ただ、彼らは主イエスの約束くださったことを心にとめて、一つ所に集まり、待っていました。

その彼らのところに、聖霊は突然降ってきたのです。**激しい風が吹いてくるような音**が響きました。**炎のような舌が分かれ分かれに現れ**ては一人ひとりの上にとどまりました。聖霊が与えられたのです、一人ひとりに。弟子たちは、そこで見たのです。一人ひとりに聖霊が与えられていることを。彼らは、主イエスの約束を信じて、それを見るようになりました。

聖霊の「赤いしるし」を身に着けてお集まりの皆さん。皆さん一人ひとりにも、聖霊が与えられています。ご自分で分からなくても、周りの人には分かります。「赤いしるし」を身に着けているのですから。皆さんが信じなくても、わたしは信じます、みなさんに聖霊の「赤いしるし」を着けさせてくださったお方が、みなさん一人ひとりに聖霊をお与えになられていることを。

《聖霊の風》を受けよう！

この礼拝の始まる前に、こどもたちは、公園に行って「聖霊の風」を吹かせる実験をすることにしていましたが、うまくいったのでしょうか。何週間か前の実験では、うちわを使ってみんなで一斉に起こした「風」がバラバラに吹いてしまって、一つの風にはならなかったようです。きっと、人がいくら集まっても、自分たちで一つの風を作り出すのは難しいのでしょう。

「聖霊の風」は、天から吹いてくるのです。天から神が起こしてくださる「聖霊の風」が、わたしたち一人ひとりに吹き当たり、皆の間を吹き抜けていくのです。だから、《吹き流し》や《鯉のぼり》のようになって、「聖霊の風」に身を任せたらよいのです。そうすれば、「聖霊の風」によって、わたしたちは一人ひとり別々であっても、同じところを見るようになるでしょう。「聖霊の風」の源、天の父のいらっしゃるところを。

だから、共に祈ることができたのでしょう、「天の父よ」と、「主の祈り」を。たしかに、使徒パウロも、わたしたちが神を「アッバ、父よ」とお呼びすることができるのは《神の子とする霊》を与えられているからだ、と教えています（ローマ 8:14~16、ガラテヤ 4:6）。「聖霊の風」を受けて、わたしたちはみな、天の父に向って顔を上げる一人ひとりとされているのです。

もちろん、皆さんがそれを拒もうと思えば、拒むこともできるかもしれません。自分は《吹き流し》や《鯉のぼり》であることに満足できない、自力で泳ぎたいのだ、と言って《竿》から離れることを、だれも止められないと思います。けれども、皆さんが本当は《吹き流し》や《鯉のぼり》なのだとしたら、それは自殺行為です。《竿》から離れたとき、もしかすると強い《風》に煽られて一瞬、驚くほど自由に、どこまでも飛んでいくことになるかもしれない。けれども、それも束の間、たちまち地面に落ちて、打ち捨てられることになってしまうでしょう。《吹き流し》や《鯉のぼり》は、《竿》に繋がっていてこそ、わずかな《風》にもなびいて、起き上がり、泳いでみせることができるのです。

わたしたちにとって、つながる《竿》は、《教会》なのでしょう。聖霊の与えられることを信じる者たちの《教会》です。《鯉のぼり》のつなげられる《竿》の天辺には、風の吹いていることを告げる《矢車》が取り付けられています。《教会》の天辺には、「聖霊の風」が吹いていることをお告げくださった《主イエス・キリスト》がいらっしゃるのでしょう。このお方は、天に昇られましたから、《教会》の天辺は、はるか天に達しているのです。そのお姿は、今のわたしたちにはほとんど見えないものかもしれません。けれども、あの弟子たちは、確かに見届けたのです、地上にいらしたあのお方が、天にまで昇られたことを。《教会》の天辺が天にまで伸ばされたことを。

さあ、一人ひとりが語りだそう！

「赤いしるし」を身に着けて、ここ教会の礼拝に連なってくださっている皆さん。わたしは、皆さんがここで、「聖霊の風」を受けて、立ち上がり、そろって一つの方向を向いて泳いでいらっしゃることを知っています。

みなさんは、声を合わせて歌われました、「聖霊よ、降りて」（『讃美歌 21』343 番）と、「聖霊によりて」（同 417 番）と。子どもたちとも声を合わせて祈られました、「天におられるわたしたちの父よ…」（「主の祈り D」）と。この礼拝堂中に響き渡っていました、激しい風が吹いてくるような音となって、天から聞こえてくるようにして。「聖霊の風」が、皆さん一人ひとりに吹き込んでは、一つのところに向かってみなさんの声を響かせるようにしてくださったのでしょう。

けれども、「聖霊の風」を受けて立ち上がられた皆さんが、これで終わらないことを、わたしは知っています。炎のような舌は、分かれ分かれに現れて、一人ひとりの上にとどまったのですから。みなさんは、聖霊に満たされて、一人ひとりが聖霊に促されて、ご自分の言葉で語りだすことができるようになられているはずなのですから。

わたしたちは、礼拝に集められれば、讃美歌を一緒に歌い、決まった祈りの言葉や信条を一緒に唱えます。それは、先達から受け継いだ貴い信仰の財産です。しっかり受け継ぎ、次の世代にも受け渡していくべきです。教会は、《一つの言葉》を共有し、それを受け継ぐ共同体であったからこそ、二千年間、世界中に広がりながら、なお《公同の教会》と呼ばれる「一つの教会」であることができたのです。

たしかに、《一つの言葉》を拠り所とできれば、安心です。けれども、教会の歴史は、この《一つの言葉》を巡って混乱し、ときに対立したり分裂したりという苦悩を重ねてきたというのも事実なのです。

それでも、「聖霊の風」は、わたしたち一人ひとりが、自分自身の言葉で語りだすようになることを促すのでしょう。なぜなら、わたしたち一人ひとりは、《一つの言葉》を自動的に発する交換可能な存在、ではないからです。それぞれが、本質から言って他と異なる、かけがえのない存在、だからです。

「聖霊の風」は、一人ひとりに等しく吹き来たります。「聖霊の風」に促されて開かれる口の語る言葉を、わたしたちは、喜びます。それ自体が、「神の偉大な御業」に違いないからです。みなさんが、教会で、《一つの言葉》をおうむ返しするのではなく、《自分の言葉》を大胆に、恐れることなく語り始めるならば、それは、間違いなく神が御業を為してくださっているのです。その人を、一人の貴い存在として立ち上がらせ、口を開かせてくださっているのです。そうです、次は、あなたの番です。